

# 中国語音別配列歴史口語辞典編纂の構想

編纂漢語音序排列の歴時口語辞典之構思

玄 幸 子

Yukiko Gen

中國的辭書基本上是字典，因為漢字是表語文字，一個漢字一個音節，一個音節一個詞，所以單音節可以表示固定意思或語法意義。口語只能表現音節與意義之結合，有時寫出來的字不合適，甚至可能寫錯。因此查找口語的辭典應該按照詞音排列，參考朱起鳳《辭通》，需要考慮編輯歷時口語辭典的基本方法。

キーワード

口語（口語） 音序排列（語音引き） 辭典（辞典） 历时研究（通時的研究）

## 1、中国語における「辞典」

“中國有字典，無辭典。”（中国に「字典」はあれど「辞典」はない）というのは後述する《辭通》の自序の筆頭の一文である。これは何を意味するのであろうか。まずはここから説き起こす必要があろう。

現代中国で最もよく使用される辞典といえば《現代汉语词典（現代漢語詞典）》であり、現在すでに第7版が出版されている。一方で《新华字典（新華字典）》も必ずだれもが持っているポケット基本字典でこれは1953年に人民教育出版社から初版が出版されて以来、商務印書館出版の現時点最新版まで実に11版を重ねている。

「詞典」というのが語彙・単語を解釈する辞書であるのに対し、「字典」は漢字1字を解釈する辞書である。ならば辞典はあるではないかということになろうが、実は「詞典」といいつつ、その配列は「字典」を基本にしていることが、中国語の辞典を一度でも引いたことがあるならば誰もが気付くはずである。現在日本で出版されている中国語辞典もほぼ《現代汉语词典（現代漢語詞典）》の編纂法に則っている。つまりわかりやすく表現するならば、日本における「漢和辞典」の配列<sup>1)</sup>と同じなのである。

周知のことながら、この点を注視して完全に音配列で中国語の辞典を編纂したのが倉石武四郎『岩波中国語辞典』である。冒頭の「はしがき」に次のように述べる。

われわれの辞典は、これらの語彙を、現在の中国においてひろく実施されている Hànyǔ

pīnyīn fāng'àn (汉语拼音方案) のつづりかたによって、完全にローマ字順に配列した。もちろんこれに応ずる漢字は、ローマ字のあとに記載されているが、いわゆる漢字の“おや字”をたてる方式とは全然ことになっている。

この中国語学史上記念碑的な辞典は、北京の口語を忠実に写した点においても大きな意味を持つ。さらに「はしがき」で「現代の、Běijīngで使用される、みみできいてわかる語彙は、相当程度、網羅することができたと信ずる」と倉石自身が述べるように、口語の辞書においては、なお一層語音を重視すべきだという基本姿勢が明確に示されている点がとりわけ重要である。

ところが、この完全にローマ字順配列をした中国語辞典は大きな評価を得ながらその後ほとんど継承されることはなかった。中国では各分野の様々な語彙辞典が出版されており、一見単語を音順に配列してあるように見えるが、よく見てみると「おや字」ごとの配列であることがすぐに見て取れる。

例えば、比較的近年に出版された《近代汉语词典》(白維国 2015) の dān を見ると“丹”“丹堦”“丹頂鶴”……“丹篆”；“单”“单榜”……“单族”；“担”“担板”……“担忧”；“耽”……“耽忧”；“髡髻”と配列され、『岩波中国語辞典』が“担”“单”“丹”“胆”……“担保”“单薄”“淡薄”のように配列するのと全く異なっているのである。

では、なぜ中国語の辞典は「おや字」配列の呪縛を解くことができないのか。この点については倉石武四郎『漢字の運命』から大きなヒントを得ることができる。関連部分を引用しながらその漢字観をたどってみよう。

……それにもかかわらず、中国人の意識は今日に至るまで単音節を基調としていること疑う余地がない。

もっとも事実上、中国の話しことばを語彙に分解したとき、そこに二音節語または二音節を含んだ多音節語が豊富に発見される。あるいはその方が中国語の多数を占めているかもしれない。しかしそれらの語彙を使用する人たちの意識を探てみると、文字によって記憶している人はしばらく別として、少なくとも他の言語とはいちじるしく違った程度に単音節への還元が容易である。(p.5-6)

と述べて、guó (国) を例に挙げ、Zhōngguó (中国) Yīngguó (英国) Měiguó (美国) Fǎguó (法国)；guójia (国家) guójī (国际) を挙げ、「たといそれが同じ文字「国」で表されることを知らない人たちでも、それが一定の意味を持った音節であることはよく分かっている」(p.6)と説明する。そして「人間の複雑な意識をすべて単音節に盛りこむこと」を都営住宅に多くの申し込みが殺到することになたとえ、「たまたま guo の尻あがり番に抽籤で入居を許されたのが「国」であった」として次のように定義するのである。

音節を組みたてる音そのものがある一定の方向と特色を持っているからこそ、そこに宿る概念もおのずから一定の範囲に限られるので、それがはっきりした場合には、ただその音を聞いただけですぐ概念が浮かぶし、概念が浮かべば発音機関がすぐそれにふさわしい活動を始める。こうした訓練を生れ落ちるとすぐ始めた人たちにとっては、一音節ごとに一つの概念を思い出し、また一つの概念を思い出すごとにこれを一音節で表現することは極めて自然である。だからこれを簡潔にまたユーモラスに表現すれば、中国人とは一音節ごとに一つの概念を吐きだす民族だという定義も成り立つのである。（p.7）

「一音節ごとに一つの概念を吐きだす」という表現は実にいい得て妙である。このあとさらに中国語の二音節語は結び目が弱く wind-mill などのハイフェンで結ばれる程度で切り離すこともできるし結びつけることもできる細いゴムバンドでちょっと留めたというに過ぎないとし、“zhǐ”という音節について zhǐtou（指头）、zhǐzhāng（纸张）、zhǐyǒu（只有）を例に挙げ、二音節化によってその意味は明確になるが、“tou”、“zhāng”自体の概念はのこっていると解説する。また、「指」と「紙」は古代では別の音系統にあったとし、「只」と「紙」は同音であるが、英語の well と very well と同様に、文法的関係を示す場合とある実態を示す場合とで使用法が異なるため混乱が起きないという。そして「音韻論的にいえば基調はあくまで単音節でありながら、同時に二音節的な作用を兼ねたものであり、逆にいえば二音節が自由にまた豊富に作られながら、あくまで単音節的な本質を忘れていないということになる」（p.9 下線は筆者による）という。

この倉石武四郎の所謂「単音節的な本質を忘れていない」ということが、つまり、表語文字（logogram）である漢字の本質に由来するのであり、まさしく「おや字」配列を捨てきれない原因ともなっているのである。そこで、当然のことながら漢字をその表記文字とする中国語の辞典は特別な理由がない限り、基本的に「おや字」配列となる。では、この「おや字」配列を意識的に廃止した『岩波中国語辞典』のその特別な理由とはなにか。編者の中国語教育論に基づくことは言うまでもないが、なによりもそれは、主として北京の口語を蒐集し記述解釈するために編まれた点にあると考える。

## 2、口語辞典編纂の意味

「おや字」配列の編纂方式が口語辞典において有効でないことを次に検証してみよう。

例えば、“雖”と“須”を取り上げてみると“須”が“雖”に通用することは夙に蔣禮鴻《敦煌變文字義通釋》で指摘されている<sup>2)</sup>。変文資料には“雖然”“雖是”という接辞を伴った2音節語彙が多出するが、“須然”“須是”<sup>3)</sup>も同時に見られる。よって、これらは音義が同じ同一語彙の表記が異なる別字と考えて良いだろう。ところが《唐五代语言词典》では“虽”は“虽即”“虽然”“虽自”などの2音節語と共に項目を立て解釈している一方、“須”については簡単に

“②虽。方言“须”、“虽”音同。”と“雖”に置き換えて解釈し、方言音が同じだと説明するのみであり、“须然”や“须是”などの項目すら立てない。他方许少峰編《近代汉语大词典》は“虽”“虽故”“虽然”“虽是”“虽则”の項目の他“须”(⑥虽。金・董解元《西厢记》第一卷：……)“须然”(虽然。《醒世恒言》第三卷：……)の2項目を立てる。これによって、変文資料に見える“须然”が後世《醒世恒言》にまで残っていることが確認でき非常に興味深いのではあるが、さて、“虽”の語群は下冊1775頁に、“须”“须然”は下冊2099頁に配置されている。同一語彙であるにもかかわらず、語音を表記する漢字が異なるために、まるで別の単語のように別々に配置され解釈されている状況は、口語語彙をとらえる過程で障害となる可能性があると考えられる。

さらに異なる角度から口語を検討すべく、次に「田常」という語彙を取り上げてみよう。

蔣禮鴻は1988年出版の第4次増訂本からこの語彙を項目に加え、次のように説明している。

#### 田常

即“填償”，抵償，償還。

董永變文：“直至三日復墓了，拜辭父母幾（去）田常。”

（頁110）王重民校記：“此變文中‘田常’凡三見，下文‘便遣汝等共田常’，及‘感得天女共田常’，王慶菽、周一良疑當作‘填償’，謂填償董永的賣身價。”…… 以下略 （p.252）

わが身を売って父母の葬式の費用に充てた董永が、父母の霊に別れを告げて“田常”に行くという文脈からも、“田常”の語義は「借りを返済する、償還する」ということだとわかる。本字に意識を働かせれば“填償”と作るのが正しいというわけである。蔣禮鴻主編《敦煌文獻語言詞典》においても“田常”の項目を立て例文を提示したうえで「按語」に詳細に解説を加える<sup>4)</sup>。

ところが、その後の辞典からこの項目は姿を消すことになるのである。その理由は、《唐五代語言詞典》の編纂方針を見れば明確に示されている。《唐五代語言詞典》は“田常”の代わりに新たに“填償”の項目を増やし、次のように解説する：

【填償】 tián cháng 偿还。变文写卷误作“田常”。《变文集》卷一《董永变文》：

“直至三日复墓了，拜辞父母几田常（填偿）。” （p.356）

“误作”（書き誤り）と判断したうえで、語彙項目自体を書き換えてしまったわけであるが、このような編纂法は問題ないだろうか。辞典を引く場合、初めからその語義をわかったうえで確認のためにひく場合もあるが、たいていの場合はその意味、用法を知る目的で調べるのであ

る。《董永變文》のこの“田常”をみて、すぐに“填償”の項目を探すことができるなら、もう辞典を引く必要はないと思われる。また、音表記に使用する漢字の選択を誤ったものの、この語音と使用法は当時の口語をそのまま映しているものであり、むしろ“田常”という表記が重要な証例にもなり得るのである。

上述2つのケースを勘案すると、口語の辞典を編纂するうえで最も肝要な点は、音引き方式をとらねば意味がないという結論に達する。では語音をメインに辞典を編纂するにはどのような手法があるだろうか。以下先人の成果からヒントを得て、構想を練ってみよう。

### 3、音引き辞書編纂の構想 《辭通》編纂の姿勢

語彙を音引きする辞典で最も参考になるのは《辭通》である。《辭通》は朱起鳳（1874-1948）が、30年の時を費やして著した辞典で1934年に出版された。編纂の動機はその自序に次のように言う。

然則辭通何為而輯也。前清光緒季年。歸自秣陵。視主講席。月以策論課士。卷中有徵用首施兩端者。以為筆誤。輒代更正之。合院大譁。貽書嫚罵。乃知事出范史。并以知前此之讀書為太疎畧也。（然らば則ち辭通は何為れぞ輯さん。前清の光緒季年、秣陵自り歸りて視しくも講席を主さどる。月に策論を以て士に課す。卷中に「首施兩端」を徵用するもの有り。以為へらく筆の誤まりと。輒ち代えて之を更正す。合院大いに譁し、書を貽して嫚罵す。乃ち事の范史に出づるを知り、并せ以って前此の讀書の太だ疎畧為るを知る也。）

この自序の内容を補足する記述が、朱起鳳の子息吳文祺の1982年重印前言に朱起鳳『古歡齋雜識』（未刊）から引用されている。

光緒乙未年（清光緒二十一年，一八九五年。括弧中の注是我加的，下同。文祺），吳外祖（名浚宣，字紫荂，清同治十年——一八七一年——進士，翰林院檢討）掌教海寧安瀾書院，月以詩文課士。余為代閱卷，加評語，定甲乙，士論翕然。一日，見卷中有用「首施兩端」字，疑為筆誤，因加墨其上云：「當作『首鼠』。」卷發，合院大譁，謂《後漢書》且未見，烏能閱文？自此潛心讀書，凡有疑義，摘載他冊。閱時既久，積帙遂多。纂成《新讀書通》二十四卷。民六（一九一七年）而後，又成續集四十八卷。他日付之梨棗，傳播藝林，未始非囊時一罵之力也。古人謂「美我疾疾，惡我藥石」，斯言豈不信哉！

要約すると、外祖父吳浚宣に代わり書院で添削をした折に“首施兩端”と書かれたのを見て、誤写だと思い“首鼠”と訂正をした。ところが、書院中が大騒ぎとなり、《後漢書》にその句が

見えているのを知り、自身の読書の浅さを恥じて発奮して読書に励み《新讀書通》二十四巻を著したとある。

また「釋例」には

- 一 此書以習見之辭為經、以較僻之辭為緯、引伸觸類、或累幅而不能盡、誠不免買菜求益之譏、然淮陰將兵、多多益辦、眼目既經習見、即手腕不敢告疲已、（此書ハ習見之辭ヲ以ッテ經ト為シ、較僻之辭ヲ以ッテ緯ト為ス。觸類ヲ引伸シ或ハ累幅シテ盡クス能ハズ。誠ニ買菜求益ノ譏リヲ免カレズ。然レドモ淮陰ノ將兵、多多益辦。眼目既ニ習見ヲ經テ、即チ手腕敢エテ疲レ已ムト告ゲズ。）
- 二 此書重在因聲求義、故以四聲分類、略阮儀徵經籍纂詁之例、但同組之辭、未必同韻、特依每辭首字之筆畫、別編索引、綴諸卷末、以利緝檢、（此書、重ハ聲に因リテ義ヲ求メルニ在リ、故ニ四聲ヲ以ッテ分類ス。略ボ阮儀徵ノ經籍纂詁ノ例ナリ、但ダ同組ノ辭ハ未ダ必ズシモ同韻ナラズ。特ニ每辭ノ首字ノ筆畫ニ依リテ、別ニ索引ヲ編ミテ、諸卷末ヲ綴ジテ以ッテ緝檢ニ利スル。）
- 三 此書注中、凡已見大字者概用○○代之、如兩○分別、則前○代上一字、後○代下一字、以省繁複而便覽觀、（此書注中ノ凡ソ已ニ大字見ル者、概ソ○○ヲ用ヒテ之ニ代フ。如バ兩○ヲ分別シ則チ前ノ○ハ上ノ一字ニ代ヘ、後ノ○ハ下ノ一字ニ代フヲ以ッテ繁複ヲ省キテ覽觀ニ便ズ）
- 四 此書包舉羣籍、以經居首、史次之、子與集又次之、凡所徵引、必詳篇目、俾利緝檢、其有須說明者、三傳經文、互有異同、此書於公穀梁經、於左氏傳之經則逕稱春秋、蓋傳習較廣、稱謂斯便、初非有先儒門戶之見也、又今本後漢書各志實出晉司馬彪之續漢書、後世刻書、展轉附益、其跡遂泯、一若蔚宗手製而劉昭補注之者、如直稱後漢志、似不衷理、爰改從續漢書名、以昭其實、（此書羣籍ヲ包舉シ、經ヲ以ッテ首ニ居ク、史ハ之ニ次ギ、子ト集ハ又之ニ次グ。凡ソ徵引スル所ハ必ズ篇目ヲ詳ラカニシ、緝檢スルニ利サ俾（シ）ムレバ、其レ須ラク説明スベキ者有リ。三傳ノ經文、互ニ異同有リ。此書ノ公・穀梁ノ經ニ於ケル、左氏傳ノ經ニ於ケルハ則チ逕（タダチ）ニ春秋ト稱ス。蓋シ傳習スルコト較ヤ廣ク、稱謂ス（ミナ）便ナリ。初メヨリ先儒門戶ノ見有ルニ非ズ也。又今本ノ後漢書各志、實ハ晉ノ司馬彪ノ續漢書ニ出ヅル。後世ノ刻書、展轉附益シ其ノ跡遂ニ泯（ホロ）ブ。一ニ若バ蔚宗ノ手製ニシテ劉昭ノ之ヲ補注スル者（ハ）、直ニ後漢志ト稱スルガ如シ。理ニ衷（カナ）ハザルニ似タリ。爰ニ改メ續漢書ノ名ニ從フヲ以ッテ其ノ實ヲ昭ラカニス。）
- 五 此書音訓、有沿用舊注者、有采清儒之說者、要皆參以意、折衷一是、兒子文祺頗究心音韻訓詁之學、有所陳述、間亦采錄、茲為節省篇幅計、不復一一識別、至余一得之見之異於昔人者、亦不特為標明、有所考辨、別詳余所撰、古歡齋讀書雜識中、（此書ノ音訓ハ、



舊注ヲ沿用スル者有り、清儒ノ説ヲ采ル者有り。皆參スルニ意ヲ以ッテシ、折衷シー是トナサント要ス。兒子文祺、頗ル音韻訓詁ノ學ニ究心シ、陳述ス所有ラバ間ニ亦タ采録ス。茲ニ篇幅ノ計ヲ節省スルガ為メニ復一一識別セズ。余一得ノ見ノ昔人ニ異ナル者ニ至リテハ亦、特ニ標明為サズ、考辨ス所有ラバ、別ニ余の撰スル所ノ古歡齋讀書雜識中ニ詳シクス。）

六 此書徵引、有字同音同而訓釋不同者、如闌干間關之類、特徵集以為附錄、俾廣異聞<sup>5)</sup>。（此書徵引スルハ字同ジ音同ジニシテ訓釋同ジカラザル者有り。闌干、間關ノ類ノ如シ。特ニ徵集シ以ッテ附録ト為シテ異聞ヲ廣メ俾（シ）ム。）

七 此書繁稱博引謬誤尚多、海內不乏通儒、若能教督以所不及、豈獨區一人之幸已哉。（此書繁稱博引スルモ謬誤尚多シ。海內ノ乏シカラザル通儒、若シ能ク教督サレンコト及バザル所ヲ以ッテスレバ豈ニ獨ダ區ダー一人ノ幸已（のみ）ナラン哉。）

とあり、以上の7条から、群書中の用例を遍く多数にわたり蒐集したこと、引用文献については經史子集の順に配列したこと、などの編纂方針が見て取れるが、本稿と特に関連のあるのは第2条と第5条である。第2条には語音から意味を引くことを重視するため四声で分類したとあり、この方針こそが《辭通》の大きな特徴となっている。ただ、この方針はあまり徹底されなかったようで、すぐ後に同じグループにあっても必ずしも同じ韻ではないことがあると記されている。また、第5条には、音訓については旧注をそのまま踏襲するか、あるいは清朝の学者の説を採ったとあり、自説が異なる場合には自撰書《古歡齋讀書雜識》に詳述したと述べている。残念ながら《古歡齋讀書雜識》は上述の通り刊行されず、詳細を知ることはできない。

さて、語音別配列歴史口語辞典編纂の基本的方針を立てるのに資するべく《辭通》編纂の経緯、その特徴などを考察してきた。このように編纂された《辭通》ではあるが、子息文祺に指摘されるがごとく、いまだ完全とは言えない。文祺はその序文でまず《辭通》の三つの特徴：第一に古籍中から蒐集した通假語句が明代の方以智《通雅》や清代の呉玉搢《別雅》など先人の専著をはるかに凌ぐこと；第二に例を引いて証するのが詳細周到であること；第三に各条目の末に自身の按語を載せること、以上《辭通》の一般の辞書とは異なる特徴を挙げた後、さらに補充するため個人の見解を述べるが、第一に古籍を読むための校勘の重要性を説き、第二に漢訳仏典の音訳語彙の蒐集が不足していることを述べ、第三に詩詞曲語中の土語俗語は本来固定した書き方をせず語音を各人各様に漢字を使って書くため同一語の異体字が大変多く、《辭通》はその一部しか掲載していないと述べ、次の語句は記載がないと指摘する<sup>6)</sup>。

（一）逼邇 辟邇 餽饌

（二）唧溜 唧溜 御溜 即溜 即留

（三）着莫 着摸 着抹 着麼

(四) 巴鼻 巴避 巴臂 把背 笆壁

(五) 林郎 林榔 林琅 林瑯 林粮

(すべて張相『詩詞曲語辭滙釋』から)

(一)は「手配する、処理する」、(二)は「賢い、利口だ、綺麗だ」、(三)は「落ち着く、あてずっぽうを言う、かわりあう」など、(四)は「根拠、手立て」(五)は「深い森」を意味する俗語である。同じ音声を異なる文字で写しているが、意味は同じ、一つの語彙である。これらの語は所謂口語の範疇に入れるべきものかと思われる。

上述の「釋例」にあるように「因聲求義」という点は、確かに語音によってその意味を知ることがより重視される口語辞典にとっては、必ず踏襲すべきポイントである。ただ、対象とする史料を経史子集として順にもれなく抽出するという方針は、文祺の指摘にあるように口語語彙を採り漏らす可能性が大きく、あまり有効であるとは言えない。また語音重視としながら四声による配置は旧来の韻書の伝統的分類の域を出ておらず、《辭通》の編纂方針には見るべきところが多いといえども、これをそのまま基本方針とするには無理があるようだ。

では今後編纂する音引き配列歴史口語辞典はどのような基本方針に基づくべきであろうか。

#### 4、音引き歴史口語辞典編纂の構想

上で検討してきたことを踏まえ、語音別配列歴史口語辞典編纂の構想を簡単にまとめるとポイントは次のとおりである。

- 1、音引き辞典 漢字に拠らず語音順に配列
- 2、同音同義で1項目とする。
- 3、誤写と思われるものも含めて資料上に現れるすべての表記を掲載する。

このポイントに沿って実際の編纂モデルを作成してみよう。まずは、《辭通》で不足であると指摘された上述の語彙について考察してみよう。

biluo 【bīluó / bìluó / bìluó】 逼邏 辟邏 餽邏

(動詞) 手配する

(参考)

逼 彼側切 / 入職幫<sup>7)</sup>

辟 必益切 / 入昔幫

餽 卑吉切 / 入質幫



邏 郎佐切 / 去箇來

邏 魯何切 / 平歌來

（考察）

現代音で第1音節の声調が第1声と第4声の差はあるものの声母は同類、第2音節は同音であるため声調を付さない見出しを立てることで、比較的处理のしやすい項目である。参考として中古音の分類を示したが、声調に関しては中古入声は現代音で各声調に分散されるため、第1声と第4声に分散しているのは説明がつく。第1音節の韻部がt入声とk入声で異なっている点に異同がみられるが、入声が緩くなった時点でほぼ同音と認識されたはずであり、この3種の漢字表記は同音語彙を写し取ったと考えて良からう。

jiliu 【jiliú / jiliú / jiliú / jiliú / jiliú】唧溜 唧溜 唧溜 即溜 即留

（形容詞）賢い、利口だ、綺麗だ

（参考）

唧 資悉切 / 入質精

溜 \_\_\_\_\_

即 子力切 / 入職精 質部

溜 \_\_\_\_\_

溜 力求切 / 平尤來 \*《集韻》による

留 力求切 / 平尤來

（考察）

唧、溜、溜は《廣韻》に収録されない。偏旁に随時“口”“水”を加えた俗字で表したものであり、基本的音符は“即”“留”と考えて良からう。

モデルを示すべく2例ほど挙げてみたが、実は語彙出現の史料の成書時期を考察することが基本になるため、厳密な記述ということを考えるのであれば、単に大枠を示したに過ぎない。また、簡便さを優先して中古音での字音を考察したが、各時代各地域の語音を考察すべきであり、この構想を実現するための基礎作業として、閉じられた資料における音体系の確立を第一とする必要がある。現在口語研究の出発点ともなる敦煌文献における変文資料の別字を抽出する作業を継続して行っており、体系的総合的整理と研究は稿を改めたい。

注

- 1) 日本の漢和辞典が中国清朝に編纂された『康熙字典』を範としていることは倉石武四郎『岩波現代中国語辞典』「はしがき」にも簡単に言及されている。
- 2) 「須」の条に「通用作“雖”」と解釈し、『漢將王陵變』他例を挙げる (1981年増訂版 p.307)
- 3) 「須是」には「すべからく」と「いえども」の2つの用法があるが、ここでは「いえども」の口語の用例を取り上げる。
- 4) 田常 tián cháng 即“填償”。抵償、償還。  
《敦煌變文集・董永變文》：……  
按：《敦煌變文集・搜神記》述董永賣身事曰：“後無錢還主人時，求與歿身主人爲奴一世常力。”  
“常力”就是“償力”。據此，“田常”當即“填償”，爲唐宋間常語。…… (p.314-315)
- 5) 附録には“間關”が項目として見えるが、“闌干”は本編卷六「十四寒」に並べて挙げられ、“間關”は卷二十二「七曷」に“契闌”の同一語として一か所に見えるのみである。
- 6) 《辭通》〈重印前言〉p.6-7
- 7) ここでは参考として中古音を示す。反切/四声・韻目・36字母の順に表記する。例を挙げると“遍”の字音は「彼則の切/入声・職韻・幫母」で示される。

参考(引用)文献

【和文】

- 倉石 1963 倉石武四郎『岩波中国語辞典』東京：岩波書店  
倉石 1966 倉石武四郎『漢字の運命』(改版)東京：岩波書店

【中国語】

- 朱起鳳 1934《辭通》中國 北京：開明書店 \*使用したのは1982重印本 上海古籍出版社  
張相 1953《詩詞曲語辭滙釋》中國 北京：中華書局 \*使用したのは1977重印本  
蔣禮鴻 1981《敦煌變文字義通釋(増訂本)》中國 上海：上海古籍出版社出版  
蔣禮鴻 1988《敦煌變文字義通釋(第4次増訂本)》中國 上海：上海古籍出版社出版  
蔣禮鴻 1994《敦煌文獻語言詞典》中國 杭州：杭州大學出版社出版  
刘・江 1997 刘坚・江蓝生主編《唐五代语言词典》中国 上海：上海教育出版社  
许少峰 2008《近代汉语大词典》中国 北京：中华书局  
白维国 2015《近代汉语词典》中国 上海：上海教育出版社